

〔續近世畸人傳<sup>五</sup>〕英一蝶

或時兩大國の主石燈臺を争ひもとの給ふきこえありしかば、やがて走行て、數多の金を出して、おのがものとし、狭き庭の内に入つしける、折しも初茄子を賣者あり、價の貴きをいはず、需て生漬といふものにして喰ひ、彼燈臺に火をともし、天下第一の歡樂なりといへり、其磊落豪放およそ此たぐひとぞ、

〔擁書漫筆<sup>三</sup>〕石燈爐の名物は、橘寺の佛像と十二支をゑりたるが、年號をえるさゝれども、天下第一の古物といふべし、次に春日の祓殿社なるは、火ぶところに鹿の形あり、春日社に火見形といふがあり、西屋、柚木、東大寺の八幡宮、三月堂、般若寺の文珠堂、秋篠寺、春日の奥院、當麻の穴虫石などいとおほかり、元興寺に延元元年の燈籠あり、太秦に賴政の寄附といひ傳しがあり、大徳寺の高桐院に幽齋法印のめでたまひしがあり、ちかき比には泉涌寺の雪見形などきこゆ、江戸淺草竹町の渡の近所に、六地藏の石燈爐とて、鎌田政清がたてけりといふがあり、相摸國筑井縣下河尻村なる寶泉寺の觀音堂には、建久二年の年號をえるせしがあり、これらは余田<sup>○小山</sup>が耳にききたもちたるを、後わすれじのためにかいつく、

〔山陽遺稿<sup>詩四</sup>〕或獲方廣寺瓦用爲燈籠索詩

髣髴桐花記阿藤、參差翠縫想觚稜、憐無功德庇孫子、一片殘鱗籠夜燈、

〔嬉遊笑覽<sup>火十下</sup>〕廻り燈籠は、顰草にをどりの事をいふ所、揚燈籠、廻り燈籠の軒にふらめき、また鷹筑波集、ことを巧みに色をよくする、かゝやくやまはり燈籠のすはう紙<sup>日能</sup>よを厭ふ姿か月のかげ法師、かしこきちゑの廻り燈籠、宗明みな寛永中の作なり、懷子めぐりあひて見しや、それれ影燈籠、身にそふや秋の月よりかげ燈籠、續山井こたくみのいそげば、廻るとうろ哉、平仄をえあはせぬるやも、じ燈籠、<sup>文字を</sup>あわかし<sup>子の</sup>瓶<sup>燭にとり</sup>、<sup>字の</sup>平仄<sup>猶</sup>あまたあれど、益なければ、錄せず、廻